9月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　素材生産協同組合　9月7日

今回は素生協の市場の開設45周年の記念市と言う事で、コロナ禍で見送られていた式典も4年ぶりに開催された。 国有林からの出材も普段より多く、来賓の方々も国・県を始めとして関係各方面の沢山の方々が列席され、賑々しく開催された。
県森連の”おでん”に対してこちらの名物は”鮎の塩焼き”だった。　かつては場内に臨時に巨大な炉が作られ、プロの料理人が炭火の周りに林のごとく立てられた”鮎の塩焼き”をドンドン配り、来賓も買い方も、また表彰される出荷者も、その場でアツアツをほお張りながら、木材談議に話が弾み、大変盛り上がったものだった。
さすがに現在は、鮎はパック詰めになり弁当と共に一人づつ手渡す様にはなったが、コロナ明けと言う気運の中で、入札の結果発表にも沢山の人が熱心にペンを走らせていた。
ただその顔触れは、森林管理署の担当官が大半を占め、今回は利根沼田署と群馬署からの出荷があったので、両方で都合10名ほどになった。 でもそれだけで普段の入札発表から見るとずいぶんと賑やかに見えるものだ。
官材はほとんど完売したが、群馬署のスギ1椪とクリ1椪が残った。
発表の後で、群馬署の若い情報官に「なぜ残ったのか教えて欲しい。」と尋ねられた。
役所のマニュアルは、昨今の3.0m造材に急激に偏る事は無かったと思われるので、比較的平準に札が入った事、加えて栃木のトーセンが秋に向けて3.0m柱材を買い始めたと思われる事。売れ残った4.0m材は14cmが入っていた事が原因と思われる事、など話した。
末口14cmの40m材は、混椪されている16cm・18cmの材とは使い道が異なってきている
この椪は3.0mで造材してあれば、16cm～20cmとなり、今回のタイミングであれば、トーセンが触手を伸ばしていたかも知れない。 トーセンが動いたのは、隣接する”加工協同組合”の工場が実質的にトーセンの傘下にあるため、この3.0m材は加工協同組合で製品化された後に栃木へ運ばれるものと思われる。 今回積極的に札を入れたのは、この立地を生かして、価格が低迷している内に、他に先んじて、押さえておこうと言う思惑もあると思われる。
その他、今回はお祝いの目玉材として、クリ・クルミ・ナラといった広葉樹も良い物が出た。
こちらの価格は、針葉樹とは別世界だが、買っているのは主に”フリーボード”と呼ばれる集成材メーカーである。 細かく挽いて良い所だけを繋いで幅広の板材であったり、階段や建具を作る。また使い易さから、DIYにも浸透しており、一般ユーザーは何の疑いもなく”無垢材”として受け入れられている。 広葉樹については、直材に越した事は無いが、長さにこだわる必要は無い。
一般材は4ページ以降だが、相変わらず精彩が無い。

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　9月20日

今回はこちらも”秋需さきどり特別市”として開催された。 同日の3時から”造林協会総会”が予定されているそうで、テーブルや座席表などがセットされている隙間で特別市が行われた。
この市は、私が市場にいたころ、虫害のリスクが治まって、買い方の意欲が出始める直前に市場に新材を並べて見せて、秋の需要期の活気を引き出す狙いで始めた市だ。
今年も林産事業のタイミングとしては、大体合っているとは思う。応札もまんべんなく入っている県森連の市場も、荷降ろし場に見える未処理材は、大体100m^{3}程で新材の受け入れ態勢ほぼ整っているとみえる。他の業界で言えば”大蔵ざらえ”とか”クリアランスセール”または”夏物大処分セール”といった時期なのである。
しかし買い方の意欲が今一つ乗って来ない。買い方にしても、この時期はお買い得なのは十分承知しているはずだが、「もう少し時期が過ぎれば、この値では買えなくなるよなー」などとと言いながら、考えている。
今回の市では、中之条のユハラ製材が目立ったがこれは、新工場の落成に伴うものと見える。
白山製材は、相変わらず低質材には意欲がある。 主に土木用材やパレットを生産していたがさらにバイオマス発電の燃料が困窮しているらしく、燃料チップの生産が増えている様だ。
白山製材のチップ生産は古く、チップ専用の工場を持ち近隣の製材工場の端材を引受けた程だ。
バイオマス発電所は、小規模な施設でも起業できる事から乱立して、中には立ち行かなくなる発電所も出てきている様だ。木を育てる側も本当は燃料なんぞにして欲しくは無いのである。
以前、仙台のセイホクの工場を見学に行った事があった。
日本でも有数の合板工場だが、この工場は電力も自給していた。 広大な敷地内に火力発電所があり、合板生産の際に発生したバークや端材を燃料としていたが、発電の担当者は、盆･暮れ･正月も休みが無いと言っていた。「一旦火力を下げてしまうと工場の再開には1週間掛かる」との事で、工場が休みの間も、発電し続けなければならないという訳だ。
工場が止まっている間燃料は生産されないので、かなりの燃量のストックが必要となる。
1つの工場を支えるだけでも並大抵の事では無いのである。
市況はスギでは9,000円/㎥を超える物は無かったが、ヒノキは高値が出ている。
栃木で生産量を減らしており、県全体でも例年の半分ほどの生産量しかないそうだ。その影響の様だが、栃木は安値の時期の対処が徹底している。 秋需の反動は注視する要がある。